

エイトピアの湖

島根一郎

竜による被害は街にまで及んでいる。抉れた石畳を避けながら治療施設の前まで歩いてきたが、休業中だった。

簡単な術で応急処置を施したため、腹の傷はほぼ回復していた。しかしこの女を肩に担いでいることによる疲労が大きい。竜から逃げおおせて以降、一向に目を覚まそうとしないのだ。

仕方なく別の場所に連れて行こうと歩き始めた時、なじみ深い声が聞こえた。

『——ム……ユーム！おい！聞こえないのか！』

「クエル？起きたのか」

ユームは女の顔を確認するが、目は閉じたままだ。

『起きてない。体は動かないままだよ。今は魔術で話しかけてる』

「動かない？魔術は使えるのに？」

『脳さえ動けば魔術は使えるよ。お前は使えないから分からないだろうけど』

「そうなのか。まあ待つてな。今治療してくれる場所探してる」

『そんなことしなくていい。この身体が目を覚ますことではないから』

「分かんないだろそんなの」

『分かるね。私ほど魔法医学に精通した人間なんてそうそういないよ』

「いや分からないね！」ユームは走り出した。

『分かるって言ってるだろ！酔うから急に走るんじゃないやねえよバカ野郎』

「ごめん」

『アルゴもエイナも死んだ。無事なのはアンタだけで受け入れられないのも分かる。けどどうか、私の言う事を聞いてよ』

「……何だよ？」

『東にあるサンカウリの街へ連れて行って。その療養施設に預けて欲しい』

「なっ……ええ？なんでだよ」

ユームは困惑してクエルの顔を見るが、表情に変化があるわけもなく、すぐに視線を前方に戻した。

「結構遠いぜ？」

『……理由は話さない。話さなくてもどうせお前が連れ

て行ってくれるからだ』

「糞っ、よく分かっていやがる」

ユームは左肩にクエルをかつぎ直し、北の門を出た。

街道をしばらく歩き、集落に到着した。

入口の正面には無造作に物資が積まれ、それを円形に囲む形で簡易的な建物が並んでいた。

物資の向こうには石造りの門が佇む。

『構造体を通って行くの？』

「サンカウリは遠い。君を運びながら山を越えるのは無理だ。でも構造内は平坦だし、導線列車に乗れば距離を稼げるだろ」

『大丈夫？……徘徊生物だっているのに』

「心配いらぬよ。列車までの深さならそんなに危険な奴もいない」

『やばくなったときにその辺に捨てたりしたら承知しないからな』

軽く受け流し、荷物整理を始めようと門前で腰を下ろすと、丁度準備の整った先客二人が立ち上がった。どちらも若い男だ。

「よし、行こうか」

「聞きました？浅めの階層にもヨロイダチが出てるらしいですよ」

「竜の影響かもな。生態系が乱れてるんだ」

装備を整えながら二人の話に耳を傾けていたが、やがて声は聞こえなくなった。

『ヨロイダチだって。浅めの階層ってどこだろう』

「あの二人が手練れだったら、百階くらいじゃないか」

『そうだといいけどね』

「……竜が関係してんのかな」

『かもね。ここみたいに地表むき出しの構造もあるから。そこかしこで暴れてるみたいだし、ありえない話じゃないよ』

クエルの話を聞きながら、ユームは階段を一步ずつ下って行った。

「俺たちが仕留めてればなあ」

『そういう考え方はやめなよ。竜に傷は与えられた。そのおかげで逃げ出せたんだから』

「そもそも竜に挑まなけりやあの二人は死ななかつた。君の体も動いていたし、俺もこんな思いせずに済んだのに」

『ナヨナヨうるさいな……最初から死んでりや苦しませ

に済むのにつて結論になるよ』

「ああ、そのつもりさ」

『……………何？どういいうこと』

「あつ！見ろよ」

階段を下り終えると、広い空間に出た。石壁には階層を表す数字が刻まれている。

「もう四階まで来たぞ」

『おい！さっきのどういう事？そのつもりって何？』

「見ろこの壁。すごく良質のレンガで積まれた壁だ！」

『お前いままで壁に注目したことなんてなかっただろバカ！わざとらしいんだよ！下手くそ！』

「なんの下手くそだよ！下手くそはお前だろ」

良質のレンガでできた壁に沿って進んでいくと、何度か分かれ道にぶち当たった。大体は世話焼きの探索者が立てた案内表示があるので、それに従って駅を目指した。二十階を少し過ぎたあたりからは比較的道は狭くなり、所々で劣化が目立つようになる。

もう案内は期待できないので、地図とにらみ合いながら歩くことにした。

「何も出てこないな」

『でかいカジリバネならさつき見たよ。アンタは気づいてなかったけど』

「どうして嘘を閉じてるのに俺より目が良いんだ」

『私は魔力で感知してるから……あ待って。前方に中型が一匹いる』

「中型？ヨロイダチじゃないだろうな」

ユームは慎重にクエルを寝かせると、剣を抜いた。

ほんやりと影が見えてくる。角ばったフォルムから伸びた脚、そして尖った刃。

「嫌な予感ってどうしてこうも現実になるんだ」

ユームは盾を低く構え、接近していく。

飛び出した刃を盾で受け、今度は少しづつ後退しながら機を伺う。

最大まで伸びきった刃状脚を回避し、持っていた剣でぶった切った。すかさず盾で殻を弾き上げ、裏返しで露になった脚の根本に剣を突き立てた。

ヨロイダチはしばらく暴れていたが、すぐに動かなくなつた。

『やるじゃん』

「やるだろ。まあ一匹ならな。もっとたくさんいたらやばかったな」

そう言つて剣を鞘に納めた瞬間、通路奥からカサカサ

と轟くような音が響いた。

「嫌な予感だ」

『早よ逃げろ！現実になる前に！』

ユームは来た道を大急ぎで戻り、崖のような場所に出た。

上からは青い光が差し、見下ろせば奈落が広がっている。二つの巨大な壁に挟まれた場所のようで、無数に開いた壁の穴からは石橋が延びて反対側の穴に接続していた。ユームが出てきたのはその内の一つだ。

背後から音が近づいてくる。

「こっち！上だ！」

壁に沿って階段状に飛び出たレンガを踏み、声のする方へ駆けた。一際長いレンガの上に男が腰かけていた。

先ほどまで立っていた場所に、ヨロイダチの群れが通り過ぎていく。

「あぶね……助かったよ」

「礼には及ばない。ここで死なれるのも困るからな」

そう話し、男は遠方の橋を指した。

ヨロイダチが探索者らしき死体に群がっている。

「さっきあそこで戦闘があった………と言っても、ヨヤツリの一方的な蹂躪だった。巢にでもちよっかいを

かけて怒らせたのだろう。それからヨロイダチが集まってきた」

「そういうことか」

改めて下を覗くが、底が見えないほど深かった。

「俺ら駅に行きたいんだけど。下の橋から行けるか？」

「……その人は怪我人か？生憎だが今はやめておけ。駅にもうじゃうじゃいるからな」

『えー……いつまで待てばいいわけ』

「いつまで待てばいいんだ？」

「分らない。一週間くらいすれば落ち着くだろう。私も列車に乗る予定だから、そのうち案内しよう」

『頼りないな……信用できるのかこいつ』

「頼りないな。信用できるのか」

「なんだと貴様」

『全部言うんじゃねえよ！』

また群れが移動していく。今度は遠くの橋だ。

男はジェイツと名乗った。しばらく待機し、半日が経過したであろう頃にユームは立ち上がった。

「半日は経ったよな」

「……一時間しか経ってない……そんなに急いでいるの

か？」

「そういうわけじゃないけど、ただ待つのはな。少し考えがある」

単純な作戦の説明には時間を要さなかった。

「なるほど……やってみようか」

一行は崖沿いを渡り、下層の橋まで下った。

穴の中に入ってしばらく歩くと、地面にぼっかり開いた大穴に辿り着いた。

「でけえ！」

「よし、さっさと入れてしまえ」

ユームは田柱型の手投げ弾に着火し、大穴に放り込んだ。それから少しして、重い衝撃音が響いた。

「行こう」

さらに歩き、広大な通路を見下ろせる場所に出た。

線路を照らすオレンジの電燈が壁沿いに連なっている。どこからどう見ても駅だが、そこら中にヨロイダチが徘徊していた。

『イ紗濫厨兎戸緒鶉ゲ紗位九ウ弩於卯瑠ノ機方法』

白い光がクエルの指先から零れる。

『解放』

光は空中で爆発し、駅内に強烈な音と衝撃が響いた。捕食者たちの目が一齐にこちらへ向く。

「いぞユーム！急ごう！」

『くっそーユームがこんなもの使えるわけないだろ』

迫る足音を聞きながら、大急ぎで大穴まで戻った。

付近には地鳴りが響いていたが、何の影も見えなかった。

『いないじゃん！』

「もう一個爆弾入れるか？」

「やめろ！すぐに現れるはずだ」

「もう着火しちゃった！」

「早っ！その辺に捨てろ！」

ユームは木の根に覆われた穴を見つけると、爆弾を放り込んだ。

「これヨヤツリの巣じゃないか？」

『疑いを持ったなら投げるなよ！』

巣が爆裂すると同時に、大穴の底から巨大な龍のようなものが現れた。

洞都黒。より上位の捕食者だ。
「駅へ向かうぞ！入場口からだ！」

ヨロイダチのか細い断末魔を背中で聞きながら、一目散に駅を目指して走った。

「大ムカデの捕食だ！」
「気にして暇ないぞ！」

『画シ御緒得禰矛火雨雲ノ羅ダ下翻徐苦絵火呉ノ灯』

「何唱えてんだ？」

『解放！』

クエルの手から燃え盛る炎が溢れ、凄まじい勢いで大穴側の通路へ広がっていった。

収まった火炎の中から筋肉の塊が飛び出してくる。

「ヨヤツリ！巢が近くにあったのか！」

そう叫ぶと、ジェイツは斧を瓦礫にぶつけ、後方へと飛ばした。スイカ大の礫が額に直撃し、ヨヤツリはごろんと横転した。

揺れる構造内を駆け、息も絶え絶えに駅に到着した。
先ほどと比べるとがらんとしている。

停車していた車両に乗り込み、操縦室まで走った。流孔を開き、魔石を設置し、起動灯を付け——……………

ヨヤツリが駅に入場してきた頃、導線列車の車輪は動き始めた。

地鳴りがどンドン遠ざかり、ジェイツも息をつく。
クエルを長椅子に寝かせ、ユームはその反対側に腰かけた。

『洞都黒……あんな浅い階層にもいるんだね』

「餌の湧く所が彼らの活動域だよ。地表に近づいたヨロイダチを追ってきたんだ」

物資を抱えたジェイツが扉を開けて入ってきた。

「食料が積んであった。ほとんど干しブドウだ」
「ありがたい。当たりを引いたな」

「……………クエルと言ったか？まだ目を覚まさないんだな」

「え？お、ああ……………そういやどこまで乗る予定なんだ？」

「私はロムタイに用がある……………死んでいった仲間たちの遺族にな。三人とも、トロールの尻に潰されて死んだ」

「トロールの尻に……？」

『ギャハハハハ！』

『ギャハハハハ！』

「貴様！笑うな！」

『お前は笑っちゃダメだろ？』

「ごめん……」

「はあ……そういう君はどこまで？」

「サンカウリまで」

「ならすぐに着く……サンカウリか。公国には私も行った事がある。独特の文化や固有の通貨など、苦勞の多い滞在だった」

「そういう場所なのか」

「良くも悪くも他とは違う。先進的な政策をいくつもうち出していることで有名だな。灯症患者の生活援助とか……最近だと安楽死に関する法改正とかも、先陣を切ったのはあの国だ」

「安楽死？………って認められてるのか？その国ではユームはクエルの寝顔を見つめた。彼女は何も言わない。

「本当最近だけだな。今のところ唯一の国じゃないか？」

クエルを抱え、ユームは操縦室の扉を開けた。

「どうした？」

「いやちよつと……車窓の景色を……」

「レンガの壁しか見えないぞ」

「レンガは好きだ」

『どこまで行くの？』

「……そうだな、ここでいいか」

「改めて聞くけど、どうしてあの街の療養施設じゃないとダメなんだよ」

『……ん？……さあ………』

「さっきの安楽死の話が関係してるのか？」

『はあ………』

「ため息じゃ分らないだろ！」

『あーそうだよ！死ぬためにサンカウリに行くの！このまま生きてたって仕方ないじゃん』

車輪の擦れる音が車内に反響している。

「やっぱりそうか」

『あえて言わなかったけどさあ、この状態すごくしんどいんだよ。めっちゃくちや苦しくて気持ち悪い。でもお前に殺してって頼むのも酷だから……あの街に着きさえすれば諦めもつくでしょ？』

「マジで、本気で言ってるの」

『本気。それが私のためになるんだよ』
車体が傾いた。坂道に入ったようだ。

「……分かったよ。連れて行くよ」

『お、聞き分けがいい』

ユームは窓を見つめて動かない。

レンガ造りの壁に小窓が現れ、細い光が車内に差し込み始めた。地表に近づいている。

『私の後に死ぬつもりだろ』

「……どうしてそう思う？」

『なんとなく分かるよ。でもあんたは生きないとだめだよ』

「どうして君はよくて俺はダメなんだ」

『だってまだ健康でしょ？やりたい事があるんだとか言ってるの覚えてるからな』

「俺だって辛いんだよ！クエルまでいなくなったらどう生きればいいんだ？」

『知らねえよ！自分でどうにかしろ！』

ギイイイイイイイイン——……………

大きな金属音を立てて、列車が急停止した。

「痛え！」

『なに？事故った？』

「ユーム！来てくれ！」

ジェイツの叫び声が出た。

先頭の操縦室まで行つて窓から外を覗くと、正面の構造が崩れて線路が塞がれていた。陽光を白く反射している。

間もなく地を貫くような衝撃が走り、瓦礫の上に黒々とした巨軀が出現する。

『翼の根本……頭部の右側………』

「欠けている。あの時の竜だ！」

青色の炎が迫り、瞬きの間に地下道を満たした。

炎が消え去った時、車内の様相は一変していた。窓が割れ、座席は焦げ、床に残り火が燻っていた。

操縦室の窓は特別頑丈なので、焼かれずに済んだ。

「やべえ」

「さて、切り抜ける方法を考えないとな」

竜は鼻を鳴らしながら鈍重に近づいてくる。炎を吐く気配はない。

「列車で突っ込んだら倒せないかな」

「無理だ。衝撃の類は効果が薄い……が……」
ジェイツは床のハッチを開いた。

『どうやって壊滅したのか思い出せ。何が有効で、何が効かないのか』

アルゴの攻撃は弾かれていた。クエルの魔術が竜に傷を付けた。炎は盾で防げる。

「竜に効く魔術、飛ばすのにどれくらい時間かかる？」

『三十秒くらい。連発は無理』

「命中率は？」

「誰と話しているんだ」

「後で話すよ。今は気にしないでくれ」

「……分かった」

『もっと時間かけて集中すれば当たるよ』

竜は留まることなく進行してくる。残された時間は僅かだ。

「あった……これだ」ジェイツが緑色の石を取り出す。

「何だ？」「浮遊鋼。反発の力で車輪を動かすのに使われているんだ」

「他の車両にもあるか？」「探してくる」

『で、どう？何か思いついた？』

「必死で別の案を探してたけど、もうこれしかないか」

操縦室の横窓から巨大な瞳孔が覗く。

そこにはもう誰もいないが、竜はその嗅覚で獲物が近くにいることを知っていた。

最後方の車両扉が開かれ、盾を持った人間が現れる。

ユームは恐怖していた。

それでも震える足で踏み出し、投擲弾を飛ばす。

爆弾は竜の頭部付近で炸裂し、大量の煙を吹きだした。

そして次第に広がり、前方車両の窓を覆った。

白煙から現れた竜は彼を凝視し、大口を開いた。蒼炎が喉の奥から光る。

とてつもない勢いの業火が吐かれた。

吹き飛ばされそうになりながら盾で受けるが、熱は貫通して左腕まで伝導していく。

地獄のような数秒間の後に放射は収まり、辺りには肉の焼ける臭いが漂っていた。

『来通イ地南箕矢ツ螺拔デ駆神火裏等下異遊攻ヤ折品…』

………解放！』

車両前方の窓から竜の首まで、煙越しの一直線に稲妻が伸びた。多少狙いからはズレたが、放たれた光は竜鱗を剥ぎ、肉を抉り取り、奥の壁まで溶かした。

ジェイツは列車上に積んだ浮遊鋼を叩き、竜の首めがけて飛ぶ。

振るわれた斧が首元の欠損に入り、メリメリと音を立てて食い込んだ。竜が暴れ、その拍子に斧が抜けた。

「まだ動くのかよ』『ほとんど千切れてるのに』

狂乱する竜の尾を飛び越え、ユームも列車上に乗った。

最後の爆弾に着火し、浮遊鋼を蹴って竜の首元にしがみつく。傷口から血液が濁流のように溢れている。そこに爆弾を無理やりねじ込み、そしてその数秒の後――

――衝撃がトンネルを揺らした。

無機質な部屋に吹き込んだ風がカーテンを揺らす。

「窓閉める？」

『このままでいい』

ステイクス、そう名付けられた終期療養施設の一室、

真白いベッドの上で、クエルは目を閉じていた。彼女は一時間後に死ぬ。

『これからどうすんの？』

『ジェイツに同行することにしたよ。本当は竜に挑んで華々しく散ろうと思ってたのにさ』

『なら討伐できて良かったじゃん。報酬も貰ったんでしょ？』

「いやマジすごいよ？家建つくらい貰ったよ。でも使い道がなあ」

『旅費に使えば？故郷にいる私の兄妹たちに話してよ！天才魔女の勇姿をさ。どこの出身かは言ったよね？』

「何度も聞いてるよ。でかい水たまりがあるんだろ」

『湖！それ現地の奴に言ったら本気で怒られるからな』

「それも知ってるよ」

ユームは椅子から立ち、窓枠から外へ顔を覗かせた。

『ジェイツも呼ぶ？ちようど真下で待ってる』

『呼んで呼んで！最後に話したいよ』

「ジェイツの頭、上から見るとベールみたいだ！」

『ギャハハハ！』